Days

藤井 真尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄａｙｓ

【Ｎコード】
Ｎ４０２４Ａ

【作者名】
藤井　真尋

【あらすじ】
ありふれた日常。でもそれは人それぞれ異なるもの。何がきっかけで変わってゆくのか…。ルックスがよく女にはいい加減だが、誰が大切なのか分かっている慶。そんな慶の気持ちに全く気づいていない透（女の子です）。そして周りの人達。何かが変わった時、日々が動き出す。

ACT．1『We are』

ACT．1　『We are』

上手くいかないな。

考え事の最後には、この言葉が最近まとめとして出てくる。
てか、まとまってねえけど。

だめじゃん。

黒いジャケットのポケットにある煙草に手を伸ばす。
けど、やめた。

透のマンションが見えてきたから。
あいつ煙草好きじゃないし。
いくら幼なじみでも“親しき仲にも礼儀あり”って言うし。
俺、偉いね。

いつもの様にマンションからそう離れていないコンビニに立ち寄った。
入ってすぐのとこに置いてあるカゴを手に取り、適当に飲み物やお菓子を入れていく。
もちろん透の好きな焼きプリンも忘れない。
雑誌が並んでるとこまで来ると、カゴを下に置いて読み始めた。

約束の時間より早めに着きそうだったから。
…時間潰し。

ほんとは早く会いたいんだけどね。
あ〜あ、ほんとあいつ今日なんて言うかな。
だいたい想像はつくけど。
そんなことを考えながら雑誌をめくっていく。

が、ふと、視線を感じ、雑誌から顔をあげ右を向く。
知らない女が立っていた。
顔は…結構カワイイかも。
微笑みながら少し上目づかいで俺をみてる。

「あの、急にごめんなさい。…お一人ですか？」
女は少し首を横に傾げた。
慣れてんなぁ…
てか、そんな媚なくても。
「あ、はい。一人ですけど」
思ってる事をみじんも出さず、柔らかく笑みを作り答えた。
「あ、そうなんですか…あの…」

女をじっと見ながら思う。
巻き髪時間かかってそうだなぁ。
冬近づいてきてるけど、ミニスカート寒くない？
香水はいいチョイスかも。
俺の番号聞きたいんでしょ？

「どうかした？」

俺は笑みを崩さない。
女は恥ずかしそうに微笑みながらも先の言葉が出ない様で。
恥ずかしい“ふり”なんだろうけど。
あ、そろそろ透のとこ行こうかな。
俺は置いてあったカゴを手にとり、煙草が入ってる方の逆のポケットから携帯を取り出した。
「あの…！」
「番号」
「え？」
女は不意をつかれたみたいだったが顔は嬉しそうだった。
「番号教えてよ。君かわいいし」
女が言い出すのを待ってたら時間がもったいない。
女は、
「そんなことないですよぉ」
と甘い声を出しながらバックから携帯を取り出す。
お互い番号を交換すると、行くとこあるからと言ってその場から立ち去った。
もちろん笑顔で。
あの女とまた会うことは…あるのかな。
気が向いたらね。
今みたいなことは珍しくなくて。
もう慣れてる。
親しくなっていっても、何回ヤッても、俺の中ではどうでもいい存在のままなんだけど。

レジで支払いを済ませ、そのままマンションに向かって歩きだす。
透の顔を思い出す。
自然と笑みがこぼれる。きっといつもみたいに昼寝してんだろな。
空が赤紫色に染まっている。

透、俺はお前の顔見れるだけで幸せ。
側にいれるだけで幸せ。

女にはいい加減だけど、それはお前以外にだよ。
“幼なじみ”ってゆう肩書があってよかったよ、マジで。
今は、お前の一番近くにいれるから。

でもさ、人間て弱いのな。
上手くいかない、なんて前は考えもしなかったのに。
自分の気持ち抑えるのも苦しくなるなんて。

この日から俺達の日々は変わっていったよな。

大袈裟かもしれないけど。

ほんとに、少しずつ。

ＡＣＴ．１『Ｗｅ　ａｒｅ』（後書き）

始めて投稿します。
未熟者ですがよろしくお願いします。

ＡＣＴ．２『電話、そして訪問者』

ＡＣＴ．２『電話、そして訪問者』

全ての関係に名前がつく世の中。

いつの間にか眠ってしまったみたいだった。
部屋の中が薄暗くなっている。
ベットの上で横になったまま、近くにあった携帯を手に取り時間を確認する。
「五時かあ…」

ちょうど二時間程眠ったことになる。
部屋の掃除で久々に身体を動かしたせいだろうか。
今日は、あるはずだった二限目の講義が休講になった。
あいた時間を家の掃除に使うなんて色気がない。我ながらそう思う。

起きる気がしなかった。もう一度携帯に目をやる。
メールが一件受信されていた。
由香子からだ。

内容は――――…慶のこと。

今日、あいつと会う約束しといて良かった。
そう思った。

由香子にメールを返すと、両腕をぐっと上にあげ大きく伸びをする。

あと三十分程で慶が来る。
差し入れの一つでも無かったらしばいてやろう。うん。
ベットから起き上がると、冷蔵庫からペットボトルの水を取り出し
喉に流し込む。
身体が潤っていくのが分かる。

部屋の電気をつけ、カーテンを閉めた。
慶が来る前にシャワーでも浴びよう。
眠気も飛んで身体もスッキリするはずだ。
面倒なことは今は忘れよう。

上の服を肩まで脱いだちょうどその時、携帯の着信音が鳴った。
めんどくさかったのでそのまま携帯を取った。
「はい、もしもし」
「あー透？今って大丈夫？」
雄平からだった。

「めずらしい…雄平からかかってくるなんて」
「だろうな」

雄平の苦笑いが目に浮かぶ。
携帯をほとんど使わない雄平は、友達の中でも貴重な存在だと思う。
というより、この現代の中においてめずらしいかな。
『会いたいと思えば会えるし、相手のこと考えてたら偶然会ったり

するんだよ。
お前らはその小さな機械に頼ってるから、第六感が鈍るんだ』
前に雄平が言っていたことをふと思いだした。
雄平はちょっと変わってる。
「で、どうしたの？」
「え、あー…」
「――…由香子？」

少しの沈黙のあと、
「うん、まあ。さっきまで一緒だったけど、
…あいつ最近さ微妙に元気なくね？」

…鋭いなあ。

「そうかなあ～」
「由香子のことだし…お前なんか知ってんのかな～って」

「さあ、なにもないと思うよ～。心配しすぎなんじゃない？」

…知ってるけど。
何となく、言えなかった。
「…そっか。分かった。急に悪かったな、ありがと」
「本人に聞けばいいのに。元気なくね？って」

「そんな彼氏でもないのに聞けるかよ」
「いや、普通友達でも聞くけど…」
おかしくて笑ってしまった。

「俺は不器用なんだよ」
「知ってる」

“黙れ。じゃあな”そう言って雄平は電話を切った。
なんて簡潔な内容。
小さくため息をつく。
てか、中途半端に服ぬいでるこの格好をなんとかしなきゃ。
風邪ひいたら困るし。
「お前、風邪ひくよ」
――――…ん？
声がした方に振り返った。
「別に俺はそのまんまでもいいけど」
口角をふっとあげてこっちを見ている慶がいた。
あまりの驚きに声が出ない。
“あ、合鍵か。”
なんて冷静にあたまの中で考えてる自分がいたりして。
――…いやいやいや…これは……
手に持っていた携帯が床に落ちた。
そしてようやく声が出た。
とっても大きな声が。
ねえ、慶。ぶっ殺すよ？

ACT．3『問題のない二人』

ＡＣＴ．３『問題のない二人』

何も言うことなんてない。
―――嘘だけど。

今、目の前にいる透は焼きプリンを食べている。ちょっと不機嫌そうに。テーブルの上には、さっきコンビニで買ってきた差し入れが並んでいる。

俺はカフェオレを一口飲むとテーブルの上に置いた。
「なあー、まだ機嫌直んないの？」
「…焼きプリンぐらいじゃ直らないんですけど」「んな怒んなって。そんな大した体じゃ―――」
「はあ！！？」
凄い目で透がこっちを睨む。
こえー。

「うそです。うそ！冗談です」
ほんと嘘。

すげえキレイだったし。細かったなぁ。
よく我慢したよな俺も。偉い。

なんだかんだ文句言いながらも旨そうに食ってるし。
子どもの頃からプリン好きだよな。
……食べてる時はあんましゃべんないし。
俺は側にいるだけ。

何気なく部屋を見渡す。久しぶりに来たけど、さっきまで着てた俺の黒いジャケットがハンガーで壁にかかってるだけで、あとは特に変わったとこなんかは無くて。

なんか安心した。

他の女の家にいても気が休まることはないから。絶対。

「さっき由香子からメールきたよ」

コンビニでもらったスプーンをかみながら透は言った。
急に由香子の名前が出たのは以外だった。

ああ、聞いたのかな。
俺から言うつもりだったんだけど…。
まあ、いい。

俺は適当に返事をする。
「へえ」
「“へえ”じゃないよ。なんか言うことないのー」

「ん？ああー…」
透はじっと俺を見る。
思わず目をそらす。
透が本気で怒ってないことぐらい分かる。
ああ、やっぱりさ――…
「つきあうよ」
「知ってるぅ～」
笑いながら茶化すように透は言った。
「なら言わすなっ。めんどくせーな」
「由香子は本気だから。大切にしてよ？」
やっぱり俺は――――…
お前にとって男じゃないんだよな。
「本気で言ってんのかよ？」
座ってたソファにぐったりと体をあずける。
「言ってない」
「おい」
「最大限の私の希望ではあるけどね」
「知るかよ」
低い声でつぶやいた。
「由香子には散々言ったんだけどね。慶は本気で女の子とはつきあわないって」
「さすが透。よく分かってんじゃん」

わかってないんだけどね。お前は。

「今も何人か女いるよ、って。でも、由香子はそれでもいいって。慶がいいって」
そう言って透はまた一口プリンを食べる。

「俺にベタ惚れだな」
「その顔に騙されるんじゃない、みんな」
「ああ、かっこいいからね」
「自分で言ってるし…」
「…じゃあ問題ないな」
「なにが？」
「あっちもそれでいいって納得してんならさ」

興味ない。
お前以外、どうでもいい。

「まあ～確かに…二人とも。…問題ないか」
食べ終ったのか、透が側まで来てソファに座った。
いきなり、バシッと太ももを叩かれた。
「痛っ！ばっ…なんだよっ」
「由香子は友達なんだから」
「…だからなに。今までと変わんないよ？」

透は呆れた様に俺を見る。
ぽんと透の頭に手を乗せる。
透が俺を見る。

そのふてくされた顔がおかしくて、思わず笑ってしまった。
「人の顔見て笑わないでよ！」
なんでもない会話。
穏やかな時間。
お前がいるだけで――――それでいい。
だけど…やっぱり上手くいかないって、この後思い知らされる。
「あのさ、慶」
「ん？」
透は微笑する。
今まで見たことがない…透の“作った笑顔”。
なんなんだよ――――…。
目が離せなかった。
「もう、ここに来ないで」
ほんの少し動揺していた俺の心に、透の言葉がめり込む。
心臓が大きく高鳴る。
「…なんだよそれ」

それだけ言うのに精一杯。

俺、今どんな顔してんだろ――――…。

何かが動き出した。

それが始まり――――…。

ACT．４『about time』

ＡＣＴ．４『ａｂｏｕｔ　ｔｉｍｅ』

俺の長い一日がはじまる。

まだ間に合う。
玄関にある鍵を奪うように取って、慌ただしく靴をはく。
いつも正確な俺の体内時計が今日はおかしい。
おかげでいつもより３０分遅くに目が覚めた。
ということは、ニ限目にある単位のヤバイ授業に遅れてしまうことになるわけで……

それはいけない！

いやいや、遅れると決まったわけじゃない。
慌てているせいか靴がうまくはけず、肩にかけていたカバンがずり落ちる。
しっかりしろ長谷川雄平、マイナス思考はいけない。
大丈夫だ、間に合う。
……はず。

「いってきます！」
誰もいない部屋に一応声をかける。
急いで玄関のドアを開け、外に一歩出た瞬間携帯の着信音が部屋に鳴り響いた。
「うおっ…！」
反射的に体が一時停止する。
音のする方を振り返ると、携帯がテーブルの脚の近くに転がっていた。

「あーまた忘れてるよ」
いつもならそのまま無視して部屋をでているはずの俺。
だけど、なんとなく、ただ、ほんとなんとなく気になって部屋に戻って携帯を取りに行っている自分がいた。

この事を、後になって後悔するんだけど。
「はい、もしもし」

まだ間に合う…のか！？
「大丈夫。間に合うって」
後ろから透の呑気な声。
「お前が言うな」

俺は今、死ぬ気で自転車をこいでいる。毎朝目にする周りの風景が、ものすごいスピードで駆け抜けていく。
「しっかりつかまってろよ？！」

「はーい」
後ろに乗っている透は俺とは逆に悠然とかまえていて、焦りのひとつもない。
ちなみに、汗のひとつもかいてやがらない。

「てかさ、お前も単位ヤバイんだろ！？」
「てかさ、スピード出しすぎじゃない？」
「誰のせいだよ！」
交差点に差し掛かったところでちょうど信号が赤になった。
わざと急ブレーキをかける。
透の顔が勢いよく俺の背中にぶつかるのがわかった。
「いったーい！」
ちょっと、すっきりした。

あの時、携帯を取りに戻ったのが俺の失敗。
遅刻しそうな俺は、俺より遅刻しそうだった透をマンションまで迎えに行く羽目になったわけで。
「じゃあ、待ってるから」
そう言い残して、俺の返事も聞かずに携帯を切った透の作戦勝ち。
その時の俺の慌てぶりは…思い出したくない。
無視するわけにもいかず、今に至る。
俺ってどこまで優しいんだろ。

間に合った。
はずなんだけど…。

「休講？！」

教室に入るなり俺の目に飛び込んできたのは、休講の知らせが書かれていた黒板だった。
まだ、ちらほら生徒は残っているが、ほとんどが雑談に華をさかせている様だ。

「せっかく間に合ったのに」
そう言って、透は何も言わない俺をちらっと見る。
教室の入り口付近で二人して突っ立ってるこの状況。
誰か笑ってくれ。
そして俺の努力を返せ。

とにかく空いてる近くの席に腰を下ろした。
横に透が座る。

「せっかくレポートしてきたのになあ」
まだブツブツ言ってるよ…。
さっきと変わらず透は呑気だ。
横目で透を見る。
「疲れた」
「え？」
「俺は疲れた」
「だろうね。うんうん」
透はわざとらしく大きくうなずく。
……ムカつく。気がつくと、教室には俺と透の二人しか残っていなかった。
「暇になっちゃったね」
「だな」
ああ、一日の始まりがこれかよ。
……ついてねぇ。

「ねむい～」
お前ほんとに女かよ、と、突っ込みたくなるほど大きなあくびをする透。中学の頃からこいつはいつもこの調子。

ついでに慶の奴も。
全然変わってない。

……ほんと、なにも。

無言でバシッと透の頭をはたいた。
「痛っ！なにすんの！？」
だいぶ、すっきりした。

「これ美味しい！雄平はなんかたべないの？」
「うん、いらない」
店の時計を見ると午後四時過ぎ。
目の前の由香子は、ついさっき運ばれてきたパフェを食べ始めたところ。

「つーかさ、人呼び出しといて、まずパフェ食べるって聞いたことねえし」
「雄平が来る前にたのんでたんだから仕方ないでしょ」
笑顔を崩さず美味そうに食べる由香子は、悪びれた様子は全くない。
ちなみに、透は休講になった授業以外はなかったらしく、あの後部屋の掃除をするとかなんとか言って帰って行った。

今度ぜってーなんかおごらせてやる。

大学の近くにあるカフェに由香子から呼び出されたのは、ちょうど最後の授業が終わった直後だった。

「良かった～、今日は携帯持ってたんだ」

第一声にそう言われた。

普通“もしもし”だろ。

頼んだコーヒーを一口飲むと、パフェから離れようとしない由香子に切り出した。

「で、どした？」

ピタッと由香子の手が止まる。

俺を呼び出す時は何かあった時。

それくらい分かってる。照れ臭そうにはにかみながら、でも、どこか不安そうな表情を俺に向ける。

思い出す。

夏も終わって涼しくなりはじめた、こんな季節の変わり目に――――。

甘くて、あの独特な鼓動と、そして、苦い感情。

三年前の俺と、目の前の由香子がだぶって見えた。

ゆっくりと、全ては回り、流れる。

それはまあ、過去のお話し。

「慶とね、つきあうことになったの」

今度はちゃんとした笑顔を俺に向けた。

慶…あいつ…。

「まじでっ」

「うん」

「意外だな。お前が慶とね〜」

「嘘つき」

いたずらっぽい目つきで俺を見る。

「慶のこと好きなの知ってた…っていうか、気づいてたでしょ？」

ああ、だからこそ何も言わなかったし、その事には触れようとしなかったよ。

だって、それが一番いいと思ったから。

「まあ、なんとなく…でも良かったな」

そう言った俺の顔はちゃんと笑えてるかな。

ありがとう、そう言ってまたパフェを食べはじめる。

慶が女に真剣にならない事とか、今のお前には関係ないんだろうな。

でも――――…

「ねえ、雄平」

「んー？」

でも、どっかでさ

「…好きになってくれるかなぁ」

淡い期待とかしてるんだろ――…？

独り言の様につぶやいた由香子に、俺は何て言っていいか分からなくて、

「ん、なに？」

聞こえないふりをした。

「別に～なんでもない」

きっと俺には由香子が望む言葉を言ってあげられないから。

ごめんな。

それからは、たわいもない話しで盛り上がった。窓の外を見ると、空が赤紫色に染まっていた。

パフェを食べ終え、右手に携帯を持ち、せっせとメールを打っている君に何となく問掛ける。

「誰にメールしてんの」

「透だよ」

ちらっとこっちに目をやると、すぐにまた手元に戻す。

それ以上何も聞かなかった。

それから少しして、友達と約束があるからと、由香子は先に店を出て行った。

俺は冷めきったコーヒーを一気に飲み干すと、カバンから携帯を取

り出した。
慣れない手つきで少ない登録件数の中から目的の名前を見つけ出すと、通話ボタンを押した。
耳元で呼び出し音が何度か鳴ると――

「はい、もしもし」

朝の疲れを蘇らせる声だ。
「あー透？今って大丈夫？」
「めずらしい…雄平からかかってくるなんて」
「だろうな」

思わず自分でも笑ってしまう。
透の驚いてる顔が目に浮かぶ。

「で、どうしたの？」
「え、あー…」

そうだよ、なんで俺は透に電話なんかしたんだろ。
慶と由香子のこと、話したかったのかな。
「――…由香子？」

…こいつエスパーかよ。
あれ、透知ってんのかな。
でも…何か切り出しにくくて、とりあえず最近あいつが元気ないよな、なんてことを聞いてみた。
「さあ、なにもないと思うよ～。心配しすぎなんじゃない？」

知らないのかも、あの二人のこと。
別に俺が言うことでもないし。

ってか、なにやってんだろ。
急にこんな事聞いてること自体おかしいでしょうが俺！

「…そっか。分かった。急に悪かったな、ありがと」
それからしばらくして電話を切った。

聞けるわけない。
言えるわけない。

慶は、お前がめちゃくちゃ好きなんだよ。

手に持った携帯を眺めてつぶやく。
「やっぱりいらね」

暗闇に包まれた部屋で寝返りをうつ。
冷蔵庫の低いうなる様な音と、ひんやりした布団が心地いい。
朝、体力をめいいっぱい使ったせいかもう眠りにつきそうだ。
瞼が重くなってきた。
薄れゆく意識の中、携帯を開けば時刻は一時過ぎ。
体内時計が正常になっていればいいんだけど。

携帯を閉じようとした時、暗闇に鳴り響く着信音。
明日遅刻したらどうすんだ。

「…はい」
「俺」
「……なに」
努めて無愛想な返事をする。
「冷てーのな雄平くんは」
からかう様に低めの声は言った。

――――――眠い。

「慶…何時だと思ってんだよ」
睡魔と闘いながらも文句は忘れない。

「お前が寝るの早いの」
「…で、なに」
「迎えに来て」
「いや」

ほんの少し眠気が覚めた。
朝も同じセリフ聞いたんですけど。

「“嫌”じゃねーの。電車なくなった」

透といい、慶といい、
――――…ったく。

「クラブで遊び過ぎなんだよ」
「今はクラブじゃないし」
「…どこいんの」

また寝返りをうつと、不意に目を向けた窓から月が見えた。
三日月だ。

もう、このまま眠らせてくれ――――。

「迎えに来てくれんの？」
「…近かったらな」
あー俺ってお人好し。

「今は警察にいる」

飛び起きた。
まさにその表現がピッタリだ。

「はああ！？？」

俺の長い一日は、まだ終わりそうにない。

ＡＣＴ．４『ａｂｏｕｔ　ｔｉｍｅ』（後書き）

やっと更新しました！読んでくださってる方、遅くなってすいません（＜＿＞）！！！！
次はなぜ慶が警察に行くことになったのか書きたいと思います。
未熟者ですがこれからも執筆頑張りたいと思います（＾＾）／！

ACT．5『black&moon』

ACT．5『black&moon』

何処か、遠くへ。
それが叶わないのなら、君の側へ。

口元の傷が痛む。
指でそっと触れてみる。痛む部分がさっきより広がってる気がした。
痣にもなっていたから、当分治りそうもない。
警察署の入り口に続いている階段に座って、おとなしく迎えが来るのを待つ。
涼しい風が俺の髪を撫でていく。

「…雄平おせぇ」

振り返って少し上に目をやると、『十條南警察署』という文字が目に入ってくる。
目線を少し下げると、警察署の玄関横に制服警官が立っている。
腕を後ろに組んで、背筋を伸ばし、ジッとこっちを見てる。

バチコーン目が合ってしまった。
“こいつこんな所で何やってんだ”
明らかに目がそう言ってる。
さりげなく目を反らしておいた。
ジャケットから携帯を取り出して時間を確認すると、時刻はもうすぐ二時。
携帯をしまうと何となく空を見た。
星一つ出ていない漆黒の空。

なんか、今の俺みたい。
真っ黒で、何にも染まらなくて。
だけど、視界の端に映る三日月の様に確なものが一つだけあって。

俺はそれから逃げるんだ。

膝に顔をうずめて、何も考えないようにする。
頭の中がうるさかった。

――――――透…。

どのくらい時間がたったのか。
しばらくそうしていると、キィ――！というブレーキ音がすぐ側でして、慌てて顔を上げた。
自転車にまたがったスウェット姿の雄平がそこにいた。
少し息が上がってるみたいだ。
とばしてきてくれたんだろうな…。

「…ありがと」
そう言って立ち上がると、
「お前も！今度ぜってーなんかおごらせてやる」
と、力強く言われた。
「”も”って何だよ、”も”って」

あたり前だけど、深夜の道はほとんど人がいなくて、静かで、雄平のこぐペダルの音が妙にはっきり聞こえる。
俺は雄平に背を向ける格好で自転車の後ろに乗って、視線を上げてずっと月を見ていた。
月が追ってくる。

お互いずっと黙ったままだったけど、先に口を開いたのは雄平だった。

「お前なにやってんだよ」
返す言葉が見つからない。
「聞いてんの」
「聞こえてる。…悪かったよ、こんな時間に」
これは本音。

「別にそれはいいんだって。……顔の傷」
「ああ、これ？もう、ほんと綺麗な顔が台無しだよなー」

「ばか」

雄平の大きな溜め息。

真剣にそう言われると、ズキッとくるものがあるんですけど…。

思考回路を数時間前に戻す。

「だから…クラブで女と遊んでたら、わけわかんねーダサい男が絡んできて、うざいから無視してたらいきなり殴ってきたんだよ。だから俺も殴り返したら相手が気ぃ失って…てか、俺そんな強く殴ってないし」

「いや、お前は昔から力の加減を知らない…」

雄平を無視して俺は続ける。

「で、誰が呼んだのか知んねえけど警官がきて俺だけ連れて行かれたの。俺だけだよ!?おかしくねえ?!先殴られたのこっちだし」

「いや、相手のびてるから…」

気がつくと静かな住宅街を抜けて、大通りに面する交差点に出ていた。

信号待ちなのか、雄平は自転車を止めている。

まばらに車が行き交う。

「お前なにやってんだよ」

「は?」

雄平はさっきと同じ言葉を口にした。
デジャビュだ。
考え込む俺。

「クラブで女と遊んでた、って。由香子ほったらかして何やってんだよ」

またまた返す言葉が見つからない。
雄平の言ってる事は正しいから。

「今までとは分けが違うんだよ。知らない、関係ない女じゃねぇだろ。透の友達だろが」

由香子の顔が頭によぎる。
嬉しそうに俺を見る顔が浮かぶ。

いつか、泣かせんのかな…。
「お前知ってたんだ」

「ん、由香子から聞いた」
「…あっそ」

信号が変わったのか、自転車がゆっくりと動き出す。
交差点を渡りきると右に曲がった。
そのまま真っ直ぐ進んで行く。

さっきまで一緒にいた女。

名前も知らない女。
どうでもいい女。

すっげえミニのスカートにキャミソール。
どうぞ見て下さい、と言わんばかりに露出して俺にすり寄ってきた。
髪も丁寧に巻き髪。最近の女って何でみんな同じ髪型なんだろ。

化粧もばっちりで。
内心うざかったけど、

でも、すぐに思った。
顔つきが――…

「似てるって…」
「あ？慶なんてー？」

無意識に口に出してた。おかしいのかな俺。
…相当きてるかも。

どんだけ好きか思い知らされる。

「んー…何でもない。あ、雄平！コンビニ！とまって、…とまれって！」

足を地面につけて引きずる様に自転車の進行をとめようとする俺。

「だあー揺らすなバカ！通り過ぎてんだろコンビニ！」

格好も髪型も話し方も全然違ったけど――――

「だからとまれって！」

「あ！バカ！揺らすなー！」

似てるって思ったんだ。

透に。

月は雲に隠れて、もう見えなかった。

ＡＣＴ．６『カクテルの途中で』（前書き）

更新かなり遅くなりました。すいません！ι

ＡＣＴ．６『カクテルの途中で』

ＡＣＴ．６『カクテルの途中で』

その冷たい目は、なにも教えてくれないけれど。

太陽が姿を隠して街が夜に包まれた頃、店も人が入りだしてきた。
ほんのり薄暗い店内は、暖色系の照明と混ざり合っていい感じ。
木造でできている店の壁や棚には、店長が海外で買ってきた雑貨が飾ってある。
店の奥に唯一ある白いソファーに囲まれたボックス席が、木造作りのこの店にはミスマッチなんだけど、それがまたいい味出してたりして。

イタリアン・ダイニングバー『ａｒｒｏｗｎ』。
バイトをはじめて半年。そこそこ人気がある店だから週末なんかは忙しくて大変だけど、そこに目をつぶれば、なかなか快適な店だ。
“今日も何事もなく終わりますように”
いつも私が思うこと。

ちょっと癖になってる。
だけど、そんな私の願いは、今日は神様に届かなかったらしい――――。

「ドリンクオーダー。パッシモオレンジ、カンパリソーダ。以上、よろしくぅ」
「はーい」
バーカウンターの中の私にマリサがオーダー表を渡す。

「ねえ、透」
そう言いながら、カウンターに両腕をついて身をのりだしてくる。
肩までのゆるいウェーブヘアが揺れる。
そのキラキラ輝いたマリサの顔を見て、何を言い出すのかなんとなく見当がついた。

「めちゃくちゃカッコイイ人がボックス席にいるんだけど!?」

……やっぱり。

「ほんとに、まじカッコイイの!背も高くって、こう、なんて言うの?
雰囲気があるし、なんかキレイ!…って聞いてんの透?!」

「聞いてるけど。マリサの“カッコイイ”って当てにならないからねー、うん」
マリサのテンションの高さとは反対に冷静に答えると、オーダー通

りにカクテルを作りはじめる私。
「いや、あれはヤバいよー」
「ヤバいって…そんないい男なら番号でも渡したら？」
「それがさ…彼女持ちっぽくて…」

うらめしそうにボックス席を見つめるマリサにつられて、私の視線も自然とそちらへ向かう。
賑わってるフロアを通り抜け、ボックス席にいる三人組の客に目が止まった。

「ねー。あのいい男の横に座ってるの彼女っぽいでしょー？」

「…うん、彼女だよ」
「え？」
「え？…あ、いや、別にっ。うん、あれはきっと彼女だねー」

意識はボックス席の方にやりながらも慌てて言葉を濁す。
「だよね。あー！いい男は全部誰かのものってか！？」
そう言って両手で顔を覆って泣き真似をしだす。

「はいはい、そんなもんですよー」
マリサの嘆きを適当に聞き流し、出来たカクテルをカウンターに置いた。
マリサは何かまだぶつぶつ言っていたけれど、渋々それを持ってフロアに戻って行く。

さて。

「来るなら来るって言えばいいのに…」
私の独り言が聞こえたかの様に、ボックス席に座る見慣れたキレイな顔がこちらを向いた。
今回だけだと思うけど、マリサの見る目はあったよ。
悲しいかな、外見だけならね？
あとは――――――屈折してますあの男。

目が合うと、慶は持っていたグラスをテーブルに置いて立ち上がった。
こっちに向かって歩いてくる。
そんな慶を見て横にいた由香子が私に気づいた。
嬉しそうに笑顔で手を振ってくる。
私もそれに笑顔で答え、手を振った。
雄平はさっきから由香子の横で集中して何か食べていたけれど、私に気づいて片手を上げた。
私も真似をして手を上げる。

慶は目立つ。
今日は黒いニットを被っているけど、１８０近い身長に加え…あのルックス。
店内を歩くだけで自然と人の目を引いた。
本人は全く我関せず。

みなさん、この男には騙されないで下さい。

バーカウンターに腕をのせて、慶は片方の口角だけ上げて笑った。

「久しぶり。カシスグレープな」
「また随分と女の子っぽいものを…」
思わず眉をひそめる。

「ばか。俺がそんなん飲むかよ。由香子のだし」

「あ、なるほどね。はいはーい」
由香子の為に動いてる慶を見るのがなんか嬉しくて、作りながら自然と顔がにやけてくる。

「…何笑ってんのお前。気持ち悪いよ？」
「ぶっとばすよ？」
笑顔で返してやった。

そこでやっと気づいた。

「なにその傷。どうしたの？」
カクテル作りの手を止めて、慶の口元にできたうっすら残る痣と傷を指差した。
「ん、ああーちょっとやりあって」
「えぇ！？」
「んな大したことじゃねえし。…殴り殴られ？みたいな」
苦笑いで口元を触る慶。

視界の端に見えるボックス席の二人。
食べすぎでむせてる雄平の背中を、由香子がさすってるところだった。

「いつ？！」
「いつって…一週間ちょっと前くらいかな」
「…へぇ」
慶と最後に会ったのは、ちょうどその頃だった様に思う。

『もう、ここには来ないで』

あの後、冷たい目をして部屋を出ていった慶が脳裏をよぎる。
テーブルに置いてあった合鍵に気づいたのは、その後のこと。

だって、由香子だよ？
今までとはわけが違う。
いくら幼なじみとはいえ、女の子の部屋に合鍵で入って来ちゃいかん。

「なに、そんな心配？」
黙りこくってた私の顔を覗き込む様に見てくる。「いや、全く」
「うわ、ひでー」
「だって絶対に慶が勝つもん。どうせ相手の方が重傷なんじゃないのー」
「……さあ？」
慶はすっとぼけた顔で首をかしげる。

「…やっぱり。由香子にあんま心配かけちゃだめだよ」
「あいつには言ってないよ。面倒だし」
でたよ、慶の悪い癖。
「面倒って…。そんな怪我見たら由香子だって気づいたでしょ？」
苛立ちそうになるのをぐっと我慢する。
「転んだって言った」
「…そんなんで納得するわけない」
「納得してたよ。別にさ…それでいいんじゃない？」
表情を変えず淡々と話す慶の顔から目が離せなかった。
なんでこの人は、たった一人の人を大切にできないんだろ。
今更だけど、二十年間幼なじみをやってきた私の疑問。
なに言っても同じなのかもしれない。
再びカクテルを作りはじめる。
あんたに言わなきゃいけない言葉が見つからないわ――――――慶。
なにも言わず、またカクテルを作りはじめた私を見て慶は言った。
「何も変わんないんだよ」
「え？」
また、手が止まる。

「今までとはわけが違う。お前も雄平も、そう思ってんだろ？」
慶の目は、遠くにいる由香子を少し映すと、すぐに私に戻ってきた。
「無理だから」
そう言った慶の顔は笑っていた。
けど、目が少しも笑ってなくて。
目を合わせていられなくて、私はカクテルグラスに入ってる氷をじっと見ていた。
先に口を開いたのは、また慶だった。
「今日行っていい？」
思わず顔を上げてしまった。
「どこに？」
「どこって、お前んち。他にどこがあんだよ」
あれ、この前のやり取り忘れてるよこの男。
「他にどこが、って？！由香子のとこ行けばいいでしょっ」
うん、これは正論のはず。
「あいつんち実家だし」
「だからなに？」

「俺ね、最近寝不足なんだわ」

話しかみあってませんけど？

「だからよろしく。あ、カクテルありがとなー」

そう言いながら、出来上がっていたカクテルを私の手から取りあげると、背を向けて歩いていく。
さっきとは比べ物にならないくらいの笑顔で。

そういえば滅多に見ない。あんな笑顔。

我に返ると慶の姿は小さくなっていて、テーブルに戻っているところだった。
慶が由香子にカクテルを渡す。
照れながらもより輝く由香子の笑顔は、ほんとに、ほんとに凄く嬉しそうで、こっちまで笑顔になる。

さて。

いろんな矛盾と、胸にわきあがる不安。

なにが正しいんだろ。
何も言わずに、あの輝く笑顔を失わない様にしようか。

いや、私がどうこう考えることじゃないのかな。

「透！」

名前を呼ばれて、目の前のカウンター越しにいるマリサに気がついた。

マリサの顔を見て、何が言いたいのか…やっぱり分かった。

ああ、めんどくさい。

「あの人と知り合いなの～！？」

やっぱり。

「まあね」

聞こえない様に小さくため息をつくと、腕をぐっと上に伸ばしのびをする。

マリサに慶のことを適当に説明しておく事と、今夜絶対に慶を部屋に入れないことを誓って、私はゆっくりと腕を下ろした。

ＡＣＴ．６『カクテルの途中で』（後書き）

更新遅くてすいません（＜＿＞；）！
次は慶の目線です。
そろそろ由香子も書かなくては。

ＡＣＴ．７『姫の憂鬱』

ＡＣＴ．８『姫の憂鬱』

一人、取り残されるお姫様。
そんな話し、聞いた事がない。

「じゃあね」
「ん、またな。気をつけて帰れよ」
「うん。バイバイ」

無理矢理笑顔を作って、軽く手をふる。
我が儘は言っちゃいけない。
雄平にも軽く言葉をかけると、慶は行ってしまった。

隣りに立ってる雄平の視線が痛い。
だけど、気づかないフリをして、夜の闇に消えていく慶の後ろ姿を、

私はずっと見ていた。

「もうちょっと一緒にいたいとかさ――」

「へっ？」

突然口を開いた雄平につられて、反応してしまった。

「いや、だからさ。もうちょっと一緒にいたい、とか言っても良かったんじゃないの？」

それが出来たら苦労はしてないよ。

「言えたら言ってますー」

透のバイト先をでた店の前。

“彼氏”を見送った後、私と雄平は特に予定もなく、ぶらぶらと歩きだした。

「俺で悪かったな」

「え？」

雄平はいつも唐突だから困る。

「横にいるのが俺でさ」

「なんで雄平が謝るのよ、…なに、私そんなに惨め？！」

悲惨な…というか、変な顔になってたんだと思う。

私を見るなり笑いだした。
失礼な奴。
だから腕をぶってやった。

「イテッ！いや、惨めとかそんなんじゃないし。ただ、我慢はよくねえぞ」
「我慢なんかしてないよ。…多分」
「どっちだよ」
雄平の苦笑いにうまく返せなかった。曖昧に笑った表情を向けるのに精一杯。

ほんとはもっと一緒にいたかった。
この後誘ってくれるんじゃないかって期待してた。

気合い入れて緩く巻いた髪も、新しく買ったワンピースも、なんだか今はむなしいだけ。
自分だけを見てくれる事を、どこかで期待しる自分に気づかされる。

「雄平、慶ってさぁ…」
「ん？」
「冷たいよね」
雄平はなにも答えない。
ただ、隣りで真っ直ぐ前を見て歩いている。
「でも、優しいの。冷めてる雰囲気は変わらないんだけど…肝心なとこで優しいから」

「うん、根はそういう奴だな。
ちょっと歪んでるけど」
「歪んでる？」

雄平はまた何も答えない。
そのままあまり会話もなく、二人は夜の街を歩く。
大きな交差点に出ると、ちょうど信号が青に変わった。
雄平とはここでお別れ。
「じゃあ私こっちだし、またね」
雄平に手をふって信号を渡る。
――はずだった。

渡ろうとした瞬間、雄平に右腕を掴まれ後ろに引き寄せられた。
おもいっきり油断していた私の身体は勢いよく雄平にぶつかった。

「ちょ…！なに！？」

振り返って見上げた雄平の顔は、こわいくらい真剣だった。

ＡＣＴ．７『姫の憂鬱』（後書き）

遅くなりました。
言い訳はしません。
読んでる方、ごめんなさい。更新頑張ります！！

ACT・8『姫の憂鬱2』

「雄平…？」

掴まれた腕がじんじん痛む。
信号はとっくに赤に変わってしまい、車が行き交っている。
雄平の突然の行動に、内心ものすごく戸惑っていた。
一言も声が出ない。

そんな私をじっと見ている。
が、呆れた様に溜め息をつくと、私の腕から手を離した。

「…マジ説教な」

「は？」

なに、よく分からない。
雄平が何を言いたいのか。

「お前は慶の彼女だろ？」

「…なに突然」

「違うの？」

“違わない”そう言いたいのに、なぜかその一言が喉につっかえて出てこない。

雄平と目を合わせてられなくて、俯いた。
理由なんてとっくに分かってる。

「じゃあ俺が代わりに言ってやる」

さっきよりも優しい声が頭に響いた。

「お前は慶の彼女だよ」

情けなかった、自分が。
ものすごく。

「だから、もっとわがままになれ。わがままって言っても、お前の場合、彼女が普通にしてもいい事我慢してるからね、わがままって言えるか分かんないけど」

だけど、それと同じくらい温かいものがぐっと込み上げてきて、胸が苦しかった。

「…てか、聞いてる？」

雄平のその言葉で慌てて顔を上げた。

「ご、ごめん。聞いてるよ」

雄平は“あ、涙目”と、私の顔を指差して笑った。
いつもなら絶対言い返すのに、そんな気になれなくて、口から出た言葉は、
「ありがとう雄平」

このタイミングかよ、と、雄平はまた笑った。

そう、理由なんてとっくに分かってる。
『彼女』という名ばかりの、形だけの存在。
実際は、つきあう前とほとんど何も変わっていない。

会いたいって言えない。
好きって言えない。

身体の繋がりも、心の繋がりも、なにもない。

こわかった。
慶にどう思われるのか。
やっと側にいれる理由を手にした幸せが、私を臆病にしていた。
でも、もうそれは終わりにしないと。

姫の憂鬱は、もう終わり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4024a/

Days

2010年12月3日14時41分発行